

ほろにかが

令和2年7月15日
全国卸売酒販組合中央会

「コロナ禍と持続環境の整備」

長野県卸売酒販組合
理事長 松下 雄一

「胸襟を開いて差しつ差されつ」「立場や年齢を超えて盃を交わす」……。今後、このような情景は私達の身近に戻って来るでしょうか。半年前、あたり前だった日常はコロナ禍によって想像も出来ない姿に様変わりしてしまいました。もしも半年前の人々に自粛中の観光地や繁華街、無人のスポーツスタジアム、ビニールシートに囲われた店舗のレジ、ほぼ全ての人がマスクをしている姿など、現在の様子を見せる事が出来たとしたら、確実に「それは嘘でしょう」と言われるに違いありません。酒類業に携わるものとしては、単に酒類の消費量が減少するだけではなく、酒の持つ、人と人との潤滑油としての機能や、文化的な側面も同時に失われて行くかも知れないという事に大変な危機感と寂しさを抱いている今日この頃です。

昨年10月の台風、そしてこの度のコロナ禍と災害が相次ぐ中、痛切に感じるのは自然がもたらす恵みと災厄の二面性です。私達の生命を支え、豊かな収穫に欠かせない水も、度を越してしまえば水害という災いをもたらします。発酵や醸造に天恵の働きをする微生物も種類や変異によっては病原性を持ち、今回のような未曾有の危機を世界規模でもたらします。また、ここ何年か世界経済の成長の原動力であったグローバル化も、この度は瞬く間の感染拡大と世界的大流行の大きな要因となってしまいました。

人間は「環境」の中でしか生活も経済活動も出来ませんが、災害があると、「環境」は様々な均衡の上に成り立っている事を強く思い知らされます。あまり短絡的に業界の事柄に結びつけてもいけません、改正酒税法に基づく「酒類の

公正な取引に関する基準」の定着は、まさに業界の「取引環境」の維持・整備に必要不可欠であり、私達が将来に渡って持続可能な業界の環境を守る為に自主的に取り組まなければならない継続課題です。また、事象の度が過ぎた時、様々な均衡が崩れた時、臆て忘れたところに災厄は訪れます。生産者、卸、小売は立場を超え、今さえ良ければという思考と、不毛な消耗戦から脱却し、未来の為に互いが良い均衡を保つよう基準を遵守し、自助努力を重ねていくべきではないでしょうか。

また、今回のコロナ禍で際立っているのが、地方業界の苦難です。家飲み需要の拡大でスーパー、ドラッグストア等、大規模店舗の酒類売上は奮っていますが、それらの売り場の帳合が少なく、地域の飲食動向に左右される業務用のシェアが高い地方卸は中央の大手に比べ苦難の度合いが高いと思われます。さらに家庭用に向けた低価格商材を持つ大手メーカーに比べ、業務用市場を頼みとする地酒、地ワイン、地ビールなど地方メーカーは出荷数量が激減しています。そして酒類の製造に欠かせない国産の原材料を支えているのが地方の農業です。この度のコロナ禍では凶らずも我が国のITの遅れや生活必需品の輸入依存度の高さ、国内調達力の脆弱性が露呈されました。現在進んでいる観光業への大規模な予算投下も必要だとは理解しますが、国の食、いわば命を支え、酒類文化も支えていただく基礎となる農業への支援と将来への投資も酒類業界からの要請として重要ではないでしょうか。中央と地方の均衡や後世に自然の恵みをより多く残すという面に目を向けた経済対策が待たれる所です。

今後とも行政官庁、中央会の特段のご指導、ご配慮を宜しくお願い致します。